

令和 4 年 4 月 30 日現在

機関番号：17301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23292

研究課題名（和文）グローバル人材を育む多文化共生社会に必要な社会科概念学習の研究

研究課題名（英文）Concept-Categorization Learning for a Multicultural symbiotic society that nurtures Global human resources

研究代表者

新谷 和幸（NIIYA, Kazuyuki）

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：70846104

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：グローバル化の進展に伴い、日本と海外で捉え方の異なる要素をもつ概念について、概念の多義性を捉えながら言語学習ではなく社会科授業を通して学ぶ必要性について検討した。

概念が国や文化圏によってその捉え方や意味内容に違いが生じる理由を、概念が言語化され意味内容を有する過程や文化が伝播する観点から迫り、教育的な意図を基に社会的事象を踏まえ概念の捉え方や意味内容の違いを認識する学びの必要性を示した。

また、社会における概念の重要性、日本と海外での捉え方の違いを認識する上で、社会科教育学の授業理論の1つである「概念カテゴリー化学習」を活用し、「安全」「責任」「寛容」に着目した授業モデルを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果により、大きく2つの学術的・社会的意義を示すことができた。第1に、国際バカロレア教育などグローバル人材育成の観点から探究的思考を伴う概念学習の必要性が提唱される中、現在の社会科という枠組みの中で教科固有の特性を生かしながら、習得をめざす概念や授業方法を明らかにした点である。ここでは、社会変化や社会問題につながる「日本と海外で意味内容の捉え方が異なる概念」に着目し、概念の必要性を実感できる学習方法を検討し、3つの授業モデルを構築することができた。第2に、授業モデルの構築の際に着目した社会科授業方法理論の1つである「概念カテゴリー化学習」の新たな活用方法を提案できた点である。

研究成果の概要（英文）：I examined the need to learn concepts that make a difference in meaning between Japan and the West as social studies rather than language learning. By focusing on the verbalization of concepts and the propagation of culture, I clarified the significance of learning it in social studies. In addition, I proposed a social studies lesson model to acquire the selected concepts of "safety/ansen" "responsibility/sekinin" and "tolerance/kanyo" by utilizing the theory of "concept categorization learning" in making lessons.

研究分野：社会科教育学

キーワード：グローバル人材育成 概念 探究学習 概念カテゴリー化学習 小学校社会科 社会科教育学 安全・安心 責任

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

これまで日本の社会科概念学習では、ある事物・事象の一般性・法則性に関する知識(概念の命題)に対し、科学的思考を用いて問題解決的に探究する学習が行われてきた。しかし、文化摩擦など、グローバル化の進展による今日の社会問題を見ると、概念が有する1つの意味内容の理解だけでは対応できない状況も生じている。概念は歴史的・文化的背景を基に意味内容が形成されるため、国や文化圏によって意味の捉え方が異なる場合がある。それ故、多様な文化背景によって、多様な意味内容を含む概念が形成される。それを明らかにする学習が、これからの多文化共生社会を生きる子どもたちにとって重要であった。

他方、PISA ショック以降、学校教育で獲得した知識・技能の活用力が問われ、未知なる社会問題を解決し持続可能な社会を実現していく上で、子どもの探究的思考を育む学習が求められている。また、グローバルな人材育成に注力する国際バカロレアの幼児・児童期の教育プログラムでは、探究する人材形成をめざす上で概念学習を重視している。探究的思考を育む概念学習という点では、これまでの社会科教育研究でも行ってきた。しかし、特定概念のもつ複数の意味内容を通して子どもの資質・能力を育む授業開発・実践は無い。

今後のグローバル化のさらなる進展、地域社会における多文化共生社会に対応した、学校現場で活用可能な授業モデルの開発が必要であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、多文化共生やグローバル人材育成の観点から、今日の社会問題につながる「日本と海外で意味内容の捉え方が異なる概念」を選定し、概念の社会における重要性を実感できる学習方法を活用しながら、未来社会の形成者として必要な社会認識、並びに資質・能力を育む授業モデルを開発し、実践を通してその有効性を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では、グローバル社会の形成者として必要な社会認識、並びに資質・能力を育む新たな社会科授業を開発・実践し、その有効性を明らかにするため、以下の方法、手順で行った。

まず、グローバル化による文化摩擦など、今日の社会問題につながる日本と海外で意味内容の異なる概念を複数選定するとともに、そのような概念が生じる要因や過程について社会的・学術的観点から検討を行った。また、子どもの発達段階や社会科カリキュラムの内容を考慮し、概念を学ぶために適した学年や単元・分野を定めた。

次に、選定した概念を授業化する上で、学習方法について検討を行った。これまでの社会科教育学における概念学習について調べながら、本研究の学習方法に示唆を与える理論として「概念カテゴリー化学習」に着目した。この学習方法理論は、小学校段階の子どもでも活用可能な類推・同定という科学的思考を用いる。子どもの探究活動を通して「概念の名辞」である学習材名から段階的に上位概念で包摂することにより、めざす概念が習得できる。しかも、概念の習得・活用を通して、概念の社会における有用性も捉えることができる。このような特性を踏まえながら、本研究で学習方法理論を援用する上で、1つの概念から複数の意味内容を学ぶ新たな解釈や学習方法について検討し、日本と海外で意味内容の捉え方が異なる概念を認識する学習指導過程を構築した。

その後、選定した概念の1つを使い、構築した学習方法を活用することで授業モデルの開発を行った。モデル開発後はそれを基に授業実践を行い、授業記録や子どもの学習課題に対する記述内容などを分析・検討し、その内容を学会で発表して研究の知見を得た。

さらに、別の概念を用いて授業開発・実践を行うことで、授業モデルの有効性を確かめ、最終的に開発・実践した授業や分析した内容を学会で発表するとともに、論文にまとめ学会論文として投稿を行い、本研究の有用性を明らかにする。

## 4. 研究成果

### (1) 日本と海外で意味内容の捉え方が異なる概念が生じる要因・過程

概念は、言語化され言葉となることで意味を有し、既存社会の環境や歴史によって生まれ、人々の感性や習慣に根差した精神性をも含み込む。それ故、国や文化圏によって、言葉やその捉え方が異なる場合が生じる。概念や言葉は、人間が社会生活を送る上で生み出した文化と言える。だが、本来既存のローカルな社会で形成されるはずの概念の意味内容が、グローバル化によって他の文化圏に伝播する際、その言葉の捉え方や意味・解釈の違いも含め正確に伝播されることは容易でない。

文化の伝播に関して、非物質的文化の伝播は物質的文化と同時ではなく遅滞するとされ、中でもローカルな環境や歴史に根付いた精神文化は最も伝播が遅く難解で、その伝播の成立は人の精神的所産の変容を意味する。社会学の知見を踏まえると、日本語に翻訳される過程で本来の文化圏でもつ意味合いまでは伝わらない。それを可能とするには、教育的な意図を基に社会的事象を踏まえ、概念の捉え方や意味内容の違いを認識する学びを設定する他ない。

グローバル化の進展によって、人々の所属する社会範疇が広がり多様化する中、今後様々な文

化圏の人々との関わりは一層増してくる。国際社会だけでなく、身近な地域社会も同様である。様々な文化圏の人々と協力し社会を形成する上でも、概念の様々な捉え方や意味内容の違いを認識することは重要である。また、概念の多義性を考えれば、その意味内容の数だけ、人々の概念に対する見方・考え方も多様である。多義的な意味合いを有する日本語の特徴を考えれば、さらに重要性は増すと言える。このような学びは、様々な共同体の一員、その主権者としての子どもの自覚を育むことにもなる。

### (2) 「安全」「責任」「寛容」概念に着目した授業モデルの開発

本研究では、日本と海外で意味内容の捉え方が異なる概念を複数選定し、そのうち「安全」「責任」「寛容」の3つの概念に着目し、授業モデルの開発を行った。

まず、「安全」概念については、安全工学の知見を参考に、安全のグローバルスタンダードとしてリスクを踏まえた捉え方と、日本で一般的な危険のない状態としての捉え方の違いに着目し分析した。それを基に、西日本豪雨災害における砂防ダムを学習材として、その安全性に対する一般市民と専門家・行政の捉え方の違いを通して概念のもつ多義性を捉えられる授業の開発・実践を行った。授業を開発・実践した内容や子どもたちの記述内容の分析を検討した結果、子どもたちは自分たちが意識する安全と社会で示す安全の違いを起点に課題探究していくことで、日本の一般的な安全と西洋を中心とした世界基準としてのリスクを踏まえた安全の捉え方の違いを捉え、さらには、安全基準のグローバル化、安全概念の社会における重要性、日本で安全・安心と併記される理由、安全と安心の概念の違いにも気づくことができた。その研究内容の一部を全国社会科教育学会で発表した。

次に、「責任」概念については、社会倫理学の知見を参考に責任概念の分類・内実から、前者は過去に関する責任と未来に関する責任の2つ、後者は関与責任、負担責任、責務責任の3つに分類された。後者の関与責任や負担責任と、責務責任では大きく意味内容が異なる。日本語と英語の捉え方の違いで考えると、英語の responsibility は自律性を含む“応答する能力”として、自らの行動結果による負担責任や役割・職務としての責務責任の意味で用いられる。本研究では、関与責任を日本語に含まれる意味内容の特性と捉え、社会倫理学の知見を援用し、責任概念のカテゴリー構造を導き出した。その後、事前研究の成果を生かしながら、広島原爆投下に対する責任に着目し、原爆に対する責任を巡る日米の捉え方の違いを学ぶ授業モデルを開発することができた。その研究内容を社会系教科教育学会で発表した。

最後に、「寛容」概念については、先の安全や責任とは異なり、寛容に当たる英語の tolerance を基に、西洋では異宗派の許容や神からの赦しといったキリスト教との関連性から、耐え忍ぶ意味合いが含まれ、上下・垂直的な関係性を基盤に許容・赦しを行う側の視点に立つ概念であることを言及した。対して日本では、自然環境や風土を背景に、集団社会生活を送る上での相互・水平的な関係性を基盤に自己への内的作用を示す許し受け入れるといった前向きな概念であることを示した。これらの知見を踏まえ、先の責任概念の学習内容を用いながら、寛容概念を習得する授業モデルを開発・検討した。その結果、社会科授業で行う場合、寛容のもつ意味や価値の多面的な側面だけでなく、文化の等価性を基に持続可能な社会形成に向けた機能的側面も踏まえ概念習得をめざす必要性について明らかにすることができた。

以上のように、「安全」「責任」「寛容」の各概念を習得する授業モデルを構成した結果、日本と海外で意味内容の捉え方の異なる概念には、そもそも意味の捉え方が明確に異なるものもあれば、グローバル化によって海外の捉え方が一般的でなく専門分野などの一部にのみ捉えられているもの、いずれも複数の意味内容をもちながら主に解釈されている意味内容が違うものなど、日本と海外で解釈される意味内容の構造上の違いがあることについても明らかにすることができた。

### (3) 概念カテゴリー化学習の学習方法論の新たな可能性

本研究では、日本と海外で意味内容の捉え方が異なる概念を学ぶ授業を構成する上で、社会科教育学の概念探究における「概念カテゴリー化学習」の学習方法理論に着目し、その特性を本研究に援用することで学習指導過程を構築した。「概念カテゴリー化学習」では、習得をめざす概念(名辞)を学習材名からカテゴリー化を繰り返すことで、学習材の意味内容も一般化される。この時、習得をめざす概念の意味内容は1つの命題に対してであり、複数扱われてはいない。

しかし、他の単元・学年で同じ概念を用い、異なる意味内容を学ぶ学習を行えば、概念の意味内容を複数捉え認識を広げながら、概念の社会における重要性を高めることも可能となる。さらには、習得をめざす概念の下位概念として、日本の意味内容を含む概念と海外の意味内容を含む概念を設定し、それらをカテゴリー化する展開で授業を構成すれば、本研究の授業モデルに援用することも可能となることを示した。

このように、本研究における授業モデルの開発、学習指導過程の構築を検討することにより、「概念カテゴリー化学習」の学習方法理論における新たな方法を示すとともに、社会科授業における汎用性も高めることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 新谷和幸	4. 巻 733
2. 論文標題 社会科における深い学びの実現とは - 児童の学びを深めるための「概念の名辞」を探究する必要性 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育科学社会科教育	6. 最初と最後の頁 pp.120-123.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 新谷和幸
2. 発表標題 児童の学びを深めるための「概念の名辞」を探究する必要性 - 「概念カテゴリー-化学習」の授業構成理論を基に -
3. 学会等名 全国社会科教育学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新谷和幸
2. 発表標題 責任概念の多義性を学ぶ概念カテゴリー-化学習 - グローバル社会や多文化共生社会の進展を見据え -
3. 学会等名 社会系教科教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 新谷和幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 概念カテゴリー-化学習の理論と実践 - 小学校社会科カリキュラム開発を視野に -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------